礼拝説教（2024 年 11 月 24 日）

説教者：中村信哉

# 今日、救いがこの家に

ルカの福音書 19 章 1-10 節

**はじめに**

今日は、有名な「ザアカイ」とイエス様の出会いの出来事から学びたいと思います。ザアカイは、「金持ち」でした。しかし彼は、イエス様に出会って「財産の半分を貧しい人たちに施し」、その他の財産は返済に充てて、自分の財産のほとんどを手放してしまったのです。おそらくザアカイは、イエス様に出会う前は、お金に執着する人でした。しかしイエス様に出会って、お金を全く手放してしまったのです。いったいザアカイに何が起こったのでしょうか？

## 1. ザアカイという人

ザアカイは「エリコ」の町に住んでいる**「取税人のかしら」**でした。「取税人」というのは、税金を集める人ですけれども、その税金というのは、当時、世界を支配していたローマ帝国に納める税金でした。ユダヤ人たちは、異邦人であるローマ帝国に税金を納めなければならなかったのです。神の民であるユダヤ人にとって異邦人は、神を知らない汚れた者でした。その異邦人に税金を納めるというのは、ユダヤ人にとって屈辱的なことでした。取税人は、ユダヤ人でありながら異邦人に納める税金をユダヤ人たちから集めていたので、同胞のユダヤ人からは異邦人に魂を売った「裏切り者」または「汚れた者」と見られていたのです。

また取税人は、ローマ帝国によって定められている税金よりも多く集めて、差額を自分のものにして私腹を肥やしていたようです。時にはお金を脅し取ったこともあったようです（19：8）。このように取税人は、ユダヤ人からお金を騙し取ったり、脅し取ったりしていたので、**「罪人」**と見られていたのです（19：7）。

ザアカイは、「取税人のかしら」であったので、**「金持ち」**でした。人々から騙し取ったり、脅し取ったりしたお金が、かしらであるザアカイのもとにたくさん入ってきたのでしょう。

イエス様は、18：24 以下でこのように言っています。**「富を持つ者が神の国に入るのは、なんと難しいことでしょう。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです」（18:24-25）**。それを聞いていた人たちは、このように言いました。**「それでは、だれが救われることができるでしょう」（18:26）**。イエス様はこう答えます**「人にはできないことが、神にはできるのです」（18:27）**。

ザアカイは「金持ち」でした。その意味で、神の国からほど遠い人でした。ザアカイの救いは、らくだが針の穴を通るよりも難しいことであったのです。しかもザアカイは、「取税人のかしら」です。罪人の中の罪人、罪人の中のトップだったのです。その意味で、イエス

様の言葉から考えても、世間の常識から考えても、ザアカイが救われる可能性は限りなくゼロに近かったのです。もしザアカイが救われるとしたら、それは神様の奇跡としか言いようがなかったのです。

## 2. ザアカイの行動

そんなザアカイはある時、イエス様がエリコの町に来られたと聞いて、**「どんな方か見ようとした」**のです。当時、イエス様の噂は広まっていて、ザアカイの耳にも届いていたのでしょう。特に、イエス様は素晴らしい教えと奇跡をなさるだけでなく、自分と同じような取税人たちとも食事をされ、マタイという取税人も弟子にされたようである、そんな噂を聞いて、どんな方か見てみたいと思ったのです。

しかしザアカイは、**「背が低かった」**ようです。イエス様の周りには多くの群衆が集まっていて、よく見えなかったのです。そこでザアカイは、前の方に走って行って、いちじく桑の木に登って、その上からイエス様を見ようと思ったのです。

イエス様を見たいというザアカイの思いは、かなり強かったように思います。背が低くてよく見えなかったら諦めてもよいものですが、前の方に走って行って木の上にまで登って見ようとしたのです。走ったり、木の上に登るというのは、あまり大人がやらないことです。余程のことがなければ、やりません。しかもザアカイは、「取税人のかしら」です。多くの部下もいる地位の高い人です。そういう人は大抵、人々の目もあるので、あまり走ったり、木の上に登ることなどないと思うのです。しかしザアカイは、人目も気にせず、走ったり、木の上に登ったりして、イエス様を見ようとしたのです。ザアカイにとって、イエス様を見るということは、簡単に諦められることではなかったのです。

するとザアカイの身に驚くべきことが起こるのです。イエス様は、いちじく桑の木の下で足を止めて、ザアカイに話しかけられたのです。**「ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから」**。ザアカイは、イエス様を見るだけでよかったのです。話しかけようとも、個人的な関係を持とうともしていなかったのです。しかしイエス様のほうからザアカイに話しかけてきて、しかもザアカイの家に泊まるとまで言われたのです。ザアカイはビックリしたと思いますが、イエス様が言われた通りに、急いで降りて来て、イエス様を喜んで迎えたのです。

イエス様を家に迎え入れたその日から、ザアカイは別人のようになってしまいます。ザアカイは、イエス様にこのように言います。**「主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します」**。ザアカイはこれまで、人々からお金を騙し取ったり、脅し取ったりしてまでお金を手に入れたりする人でした。しかし彼は、貧しい人たちへの愛を持つようになったのです。自分の財産の半分を貧しい人たちへの献金としたのです。そして、自分の今までの罪を認めて、返済と償いをするのです。財産の半分を献金し、残りの半分で脅し取ったお金を四倍にして返済すると言うのですから、ほとんど自分の財産は残らなかったと思います。少なくとも、「金持ち」ではなくなっ

たと思います。彼はこれまでお金を手に入れることに一生懸命でしたが、イエス様に出会って、お金を全く手放してしまったのです。

### 3. ザアカイの救い

いったい彼に何が起きたのでしょうか。ザアカイが家の中で、イエス様とどんな会話をしたのかは書かれていません。ですから私たちは、突然ザアカイが変わってしまったような印象を受けます

しかし９節のイエス様の言葉から、ザアカイに何が起こったのかをある程度知ることができます。イエス様はこう言われました。**「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから」**。

ザアカイはこの日、「救われた」のです。これは確かなことです。しかもイエス様は、「救いがこの家に来ました」と言われました。「救いがザアカイに来た」のではなく、「この家に来た」と言われたのです。ここでの「家」という「オイコス」というギリシヤ語は、「家族」「家庭」「一家」とも、他の個所で訳される言葉です。ザアカイに家族がいたかは書かれていません。しかしこの日、ザアカイだけではなく、ザアカイの家族も救われた可能性があります。ザアカイは「背の低い嫌われ者」というイメージがありますが、それだけで独身であったと決めつけることはできません。社会的な地位もあり、経済力もあったので、結婚して家庭があったと考えるのが自然ではないでしょうか。イエス様がザアカイの家に泊まったのは、ザアカイだけでなく、ザアカイの家族も救うためだったのではないでしょうか。

パウロは、**「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒 16：31）**と言いました。この時の「家族」という言葉は、今日の聖書箇所の「家」と同じ「オイコス」というギリシヤ語が使われています。

この日、ザアカイとザアカイの家（家族）が救われたのです。なぜでしょうか？ザアカイがお金を手放したからでしょうか。貧しい人に施し、脅し取ったお金を返済し償おうとしたからでしょうか？そうではありません。それは、ザアカイの救いの「条件」ではなく、救いの「結果」です。ザアカイは、救われた感謝と喜びから、自発的にお金を手放したのです。

では何がザアカイとザアカイの家（家族）を救ったのでしょうか。イエス様は、「この人もアブラハムの子なのですから」と言われました。「アブラハムの子」とは、単なるユダヤ人という意味ではありません。パウロは、このように言いました。**「信仰によって生きる人々こそアブラハムの子である、と知りなさい」（ガラテヤ 3：7）**。「アブラハムの子」というのは、「信仰によって生きる人々」のことを言うのです。つまりザアカイも、「信仰によって生きた」のです。イエス様を信じたのです。ザアカイは、イエス様を「主よ」と呼んでいます。ザアカイは、イエス様こそ神であると信じたのです。その信仰が、ザアカイとザアカイの家（家族）を救ったのではないでしょうか。

イエス様はなぜ、金持ちが救われるのは難しいと言われたのでしょうか。それは、お金には人を支配する力があまりにも強いことを知っていたからだと思います。お金は、まるで神

であるかのように、私たち人間の心を支配するものです。私たち人間はいつの間にか、お金こそ私たちの命を守り支えてくれるもの、私たちの夢や希望を叶えてくれるものと考えて、お金さえあれば生きていける、お金さえあれば幸せになれると考えてしまうのです。お金は神様から与えられるものですが、私たちは目に見えない神様より、目に見えるお金に信頼してしまうのです。そしていつの間にか、神様よりもお金を信頼してしまうのです。お金があれば、食べ物も買えるし、洋服も買える、家も車も買えるし、子どもを良い学校にも通わせることもできる、たとえ病気になってもお金があれば治せる、私たちはお金があれば何でもできる、お金があれば幸せになれると考えてしまうのです。目に見えない神様に祈るよりも、目に見えるお金のほうがよっぽど現実的で頼りになると考えてしまうのです。だからこそ使徒パウロは、このように言っています。**「今の世で富んでいる人たちに命じなさい。高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き」**(**Ｉテモテ６:１７**)なさい。

ザアカイはこれまでお金を頼りに生きていました。お金を神様のように崇めて信頼していました。しかしイエス様に出会って、イエス様こそ神であることが分かりました。お金は神様ではないことが分かりました。お金は、自分のことも、家族のことも救ってくれないことが分かりました。そして、これからはお金ではなく、イエス様に信頼していく決心をしたのです。だからこそザアカイは、お金を全く手放すことができたのではないでしょうか。

ザアカイは、「金持ち」で「取税人のかしら」でした。救いからは程遠く、救われる可能性は限りなくゼロに近い人でした。「この人は救われないだろう」という人の代表のような人でした。そのような彼が、なぜイエス様を信じ救われることができたのでしょうか。１０節でイエス様はこのように言われました。**「人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです」**。ザアカイが救われたのは、イエス様がザアカイを捜して見つけてくださったからです。イエス様が木の上のザアカイに話しかけ、家に泊まってくださったからです。ザアカイが救われたのは、全くイエス様の一方的な恵みによる奇跡だったのです。

イエス様は、ザアカイだけでなく、ザアカイの家（家族）をも恵みによって救ってくださったと私は信じたいと思っています。イエス様は、私たちだけでなく、私たちの家族をも捜してくださっているのではないでしょうか。私たちの家族が目に見える現実では、救いからは程遠い、救われる可能性はゼロに近いと思うかもしれません。しかしイエス様は、針の穴にらくだを通す方です。救いから最も遠いと思われていたザアカイをも変えて救われる方です。ですから私たちは決して諦めてはいけません。走ったり、木に登ったりしてでも、イエス様を求めることを止めてはいけません。イエス様はきっと、私たちの前に立ち止まり、「わたしは今日、あなたの家に泊まる、今日救いがこの家に来た」と言ってくださる日が来るのではないでしょうか。

**おわりに**

先週は、「収穫感謝礼拝」で、「感謝のしるしとしての献金」という面をお話しました。今

日は、ザアカイの救いの出来事を通して、「献身のしるしとしての献金」ということを考えたいと思ったのです。私たちは、毎週の礼拝で献金を献げます。献金は、私たちの救いの「条件」ではなく、救いの「結果」です。救われた感謝と喜びから、自発的に献げるものです。その意味で、献金は「感謝のしるし」です。また献金は、私たちの信仰の告白でもあります。お金は、私たちの心を強く支配するものです。まるで神であるかのように私たちの心を支配します。しかし私たちは、献金を通してお金を手放すことによって、私の神は、お金ではなく「神様、あなたです」という信仰を表すのです。お金ではなく、「神様、あなた」に望みを置いて信頼していきますという信仰を表すのです。その意味で、献金は「献身のしるし」と言われるのです。

イエス様を信じて救われた私たちは、お金ではなく神様を信頼していきます。お金ではなく、イエス様に望みを置いていきます。お金はもちろん大切なものです。私たちの生活に必要なものです。しかしお金は、私たちのことも、私たちの家族のことも本当の意味では救ってくれません。私たちと家族を救ってくれるのは、イエス様だけです。その意味で私たちは、お金に支配されるのではなく、与えられたお金を賢く用い、時にはザアカイのように喜んで手放すこともできるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

お金は私たちの心を恐ろしく支配するものです。私たちは目に見えない神様よりも、目に見えるお金を信頼する誘惑にさらされています。私たちは世の流れの中で、目に見えない神様よりも、目に見えるお金の方が現実的で頼りになると思い込んでしまいます。

しかし私たちは、主なる神様を信じる者です。天地の造り主であり、私たちの罪の贖い主であるイエス様を信じる者です。どうか私たちが、あなただけに望みを置いて生きることができますように。

また私たちの家族をも捜してくださるイエス様。どうかたとえ目に見える現実が救いからほど遠く見えても、救われる可能性が限りなくゼロに近く思えても、針の穴にらくだを通すことができるイエス様を、諦めずに求め続けることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。